

平成28年度北陸地区国立大学学術研究連携支援報告書

研究グループ名	造形活動と図画工作の学びの連続性検討グループ (支援期間：平成27年度～平成28年度)			
大学名	所属		氏名	
金沢大学	人間社会研究域 学校教育系 教授		○滝口 圭子	
富山大学	人間発達科学部 准教授		○若山 育代	
注1. 各大学の研究グループ責任者の氏名には○印。 注2. 所属（その他の機関については職名も）については、平成29年3月末現在を記入。				
その他の機関の構成員	機 関 名	所 属	職 名	氏 名
成果概要	<p>本研究の目的は、小学校1年生の図画工作の学びの内容を明らかにした後、幼稚園年長児の造形からの学びの連続性と非連続性を記述することであった。</p> <p><活動実績></p> <p>1. 観察調査：2015（平成27）年度より継続</p> <ul style="list-style-type: none"> 対象児：金沢大学学校教育学類附属小学校及び富山大学人間発達科学部附属小学校1年生2名ずつ計4名を観察対象とした。昨年度に観察対象とした金沢大学及び富山大学附属幼稚園年長児計4名の小学校就学後の様子を継続して観察した。 観察期間：2016（平成28）年4月から7月にかけて、小学校1年生の図画工作の授業を、金沢大学では7回、富山大学では4回観察した。 <p>2. 成果発表</p> <ul style="list-style-type: none"> 日本保育学会第69回大会（東京学芸大学、2016年5月8日）において自主シンポジウム「幼児の造形活動から考える小学校図画工作との連続性と非連続性」を開催した。企画・司会・話題提供を滝口が、企画・話題提供を若山が担当した。 若山が第一著者として美術科教育学会誌「美術教育学」（査読有り）に下記論文を投稿し、採択された。 若山育代・滝口圭子 2017 年長後期から小学校1年スタート期にかけての「造形活動に向かう態度」の変化に関する事例的縦断研究 美術教育学, 38, 479-489. <p><研究成果></p> <p>幼小接続期の「造形活動に向かう態度」の変容を追跡した結果、継続して認められた態度は「素材との対話を行う」(S男)「自信をもって活動に取り組む」(T男)であり、年長児後期にのみ認められたのは「友達と一緒に楽しむ」(S男)「リーダーシップをとる」(T男)、小学校1年スタート期にのみ認められたのは「教師の指示に従って動く」(S男)「活動を他者に認められる」(T男)であった。</p> <p>一方で、年長児の造形及び小学校1年生の図画工作における製作の「目的」では、「作りたいから作る、遊びで使うために作る」(年長児)と「表現するために作る」(小1)という相違が、「対象」では「自分や友達の思考」(年長児)と「教科書または自分の思考」(小1)、「方法」では「“考えながら作る”→“作りながら考える”という流れ」(年長児)と「“考えてから作る”→“考えながら作る”→“作りながら考える”という流れ」(小1)、「評価」では「主たる評価者は友達、観点は実用度、具現度」(年長児)と「主たる評価者は教師、観点は巧緻性、制約下での独自性」(小1)という相違が認められた。</p> <p>以上を踏まえ、図画工作を主要教科の周辺に位置づけて活用するという合科のあり方を問い直し、図画工作を中心に据えた合科的単元の案出について提言した。</p>			
獲得した外部資金	<p>【採 択】</p> <ul style="list-style-type: none"> 平成28年度若手研究(B)(H28～H30)、保育専攻学生の個人差に応じた指導計画作成力向上の指導法、若山育代(代表)、3,250千円 <p>【継 続】</p> <ul style="list-style-type: none"> 基盤研究(C)(一般)(H26～H29)、幼児教育と小学校教育の接続期に求められる支援の縦断的追究：幼小の段差の克服の過程、滝口圭子(代表)、3,500千円 			